

陣引揚船宗谷です。途中船体故障で、海の真只中で十三日を過ごし、三月三日佐世保に着きました。お金は持たされませんでした。上陸のときには、一人千円を分配されました。

東京での汽車の乗りかえのときに偶然にも知合いの方に声をかけられ、いくらかお金をお借りして食品を買い、ようやく目的地小樽の実家に着きました。

女、子供の私共家族の終戦でのおそろしさ、そして不安。大連では満鉄の会社に貯えたお金、郵便局への貯金等、何の保障もありません。又家具其他の日用品、必要な物ばかりです。今はどうなっていることでしょうか。

夫、文明は南方の戦地から引揚後大病に二度もかかり、数年後また高校の先生にもどりました。六年間勤務の後死亡しました。昨年平成元年に二十三回忌を済ませました。

私は、職を得た娘に助けられながら今二人で人生を過ごしております。私八十六歳を迎えようとしております。娘は六十二歳になります。

遠く奥地から歩いて歩いて歩いて歩いてようやく帰り

ついた人。子供を中国人に預けて、そのままの人、途中で、子供の死に会って、着ていた着物の片袖だけを身代りとして持って帰った人の話を聞く。船の中で死んだ子を生きているかのように抱いて。水葬にされたらと必死だったあの母親、戦争でなくなった方は勿論だけれど後に残ってもっともっと苦しいつらい目に合った人達、こんな苦しみは、二度とあってはならないだろうけれど、体験した人達もかなりの年齢になり、戦争を知らない人達の時代となって来ました。

敗戦の満州脱出記

千葉県 松本 國忠

真夜中の突然の電話に起こされた。

局長からの電話である。

「おいソ連の飛行機らしいぞ。すぐみんなに招集かけろ。」

ただちに身仕度をして家内に言い含め局へ駆けつけ、

職員を招集した。二十年八月八日未明、牡丹江総省滴道街、小さな炭鉱のまちである。

越境してきたソ連機は少数ながら去っては来り、あわただしい朝を迎えた。

局長はじめ職員も次々と駆けつけて小さな局舎の中は一変して緊張がみなぎる。

当時アメリカのB 29が朝鮮半島を北上中という情報が飛んでいたが状況が大きく変わったのである。

ようやく夜が明けてあちこちのまちがやられているという情報も飛びかう。

翌日になって情勢は次第に深刻化し上部機関から「現地を閉鎖して牡丹江へ集結せよ」と命令が来る。

満人（中国人）社員には局長からそれぞれ各家庭に帰るよう指示、日本人社員は身仕度をして駅に集結するよう指示あり、私も帰宅して家内は身重の体で二歳の子を背負い若干の握り飯、飯ごう、米、子どものオシメなど用意して駅へ向う。

あちこちでは火の手が上り、ソ連機の機銃掃射を受けた死骸がころがっていた。

駅では非難する大勢の人でごった返しである。

三〜四時間して漸く無蓋貨車が引揚の人達を乗せてはいつてきた。

局長やほかの社員達ともばらばらになってしまった。

林口を経由して牡・佳線（牡丹江・佳木斯線）を南下して牡丹江に到着したのは翌日である。

責任者の指示により各社員住宅に分散して泊まることになった。

あちこちで焼夷弾が落下、火の手が上がっていた。

翌日牡丹江駅から男子のみ新京（長春）へと軍用列車で出発、途中哈爾浜の駅でこの先暴動で列車が通れないということで一先ず哈爾浜で下車、哈爾浜中央電話局（以下中話）へ集結することになる。

家族は状況につき次第牡丹江から新京へ直行することとなった。

駅の構内では将校が軍の装備のまま男泣きに泣きながら「皆さんも日本国民として羞かしくない行動をとって下さい」と別れの言葉をかわした。

八月十五日終戦の詔勅が下され終戦となったことを知

る。

ハルピン中央電話局の広いフロアに毛布を敷きつめ各自携行の図のうを枕に起居することとなった。

日をおかずソ連の列車が軌道を拡げながら大きな鐘を鳴らして哈爾濱駅に乗り入れて来た、ソ連の軌道は広軌である。又、ソ連軍の威風堂々の進攻には街中で圧倒された。私は知り合いの同僚社員とソ連兵の指揮下に各機関の電話機撤収作業を行う。

一日二日たち天幕生活している一般の日本人が暴行を受けソ連の憲兵に通報し兵はピストルで射殺されたと聞く。

九月も半ば過ぎのある日新京行きの開拓団の輸送列車がはいっているという情報で取るものもとりあえず洋車(馬車)で駅へ駆けつける。

やっと開拓団の人達を見つけて乗せてもらうことになった。

かくしてようやく新京駅に到着、みんなにお別れして何人かの同僚と大同大街へ出て独身寮へ向う。

ようやく一か月余で妻子に逢えた喜びは一しおのもの

があった。

寮の一室での家族とようやく人心地ついた生活がはじめまった。

寮長から状況報告があり今年中の帰国はできるかどうかわからない越年する覚悟でいるようにと話しあり、それぞれ中国人の家庭、商店へ使役に行ったり、たべものや衣料、物品など仕入れては売って生活することとなる。一つの日本人街である。

街のあちこちではソ連将校、特に婦人将校が目立つ。郊外では冬を目指して日本人墓地が何千となく掘られている。

そのうち私も家内もバラチフスにかかり、起きていることができずとうとう子どもを餓死させてしまう。

子どもの遺体は寮の人達が露天の焼き場で焼いてくれた。

間もなく二人とも一階の何十もある病室に移され毎日医師、看護婦さんの看病で立ちなおることができた。

若干稼いだ金で冬の軍服、軍靴など手に入れることができ越冬準備、ささやかながら新年を迎え、皆と一しょ

に一日一日と帰国の日を待ちわびることになる。

冬も去り、春来り、やがて七月半ばようやく帰国の情報が入り待ちに待った祖国日本への帰国、どんなに待ち侘びたことか。

出発！といっても凶のう一つ、いや体一つでもいいとみんな喜びに湧いた。

輸送列車に乗り込んで一路南下、途中機関士に金をつかませないと出さないとかで列車がとまることもあったがようやく錦県に到着した。

ところがパラチフス発生で一週間足どめ！。

ようやくコロ島からアメリカの貨物船に乗り込み、途中玄海灘で大荒れ、胃痛に悩まされモルヒネを注射してもらい辛うじて乗り切ることができた。

二日目懐かしの祖国日本を望むことができた。

博多に上陸、銀シャリのお握りを配られ、はくばることができた。

仮設の宿泊所で一泊帰郷の手続など済ませ翌日それぞれ懐かしの故郷への途についた。

二十一年も八月の末であった。

死の逃避行

北海道 福田むめ

昭和十二年埼玉県庁を退職、満州奉天省へ土木技術者として渡満した主人は五十年に死亡。

渡満した当初は生活も楽で給料は約二倍の百円ぐらいでした。戦争が激しくなり日本人の生活も変わって来ました。奉天より蓋平県へと転勤主人も召集され、そして終戦となりました終戦と同時に日本人の身に危険が迫り、荷物を馬車十台ぐらいに並べて田舎の学校へと非難しました。

その晩からダイナマイトや鉄砲や鉄棒などで暴民がおそって来ました。だんだんと人数も多くなってくるので、若い人達が毎日のように犠牲者が多くなって来ました。そして男性達はどこかにつれて行かれ女子供達ばかり残ってしまい、男の方は少なくなり食料も手に入りにくくなり、そして言葉たくみに身の補償をしてやると